

# フレデリック・スタール（お札博士）と四国遍路

ディビット・モートン

## はじめに

この数年、四国遍路をする外国人が増えてきている。しかし、初の外国人遍路は誰だったのだろうか。日本語の文献を見ると、1939年に出版された『遍路と人生』（高群逸枝著）にはこう書いてある。「遍路には、いろいろの人が行っている...外国人ではアメリカのスタール博士、ドイツ人アルフレッド・ポーナー氏などがある」(p67)。この報告は「フレデリック・スタール」がどういう人物か、また、いつ遍路をしたのか、どうして遍路をしたのかを発表する。(参考:ポーナー氏は1922-1928年の間、松山高等学校でドイツ語の教師をして、1927年に四国遍路をした。ポーナー氏は参拝の4年後に『Wallfahrt Zu Zweien: die 88 Heligien Statten von Shikoku』(同行二人:四国八十八ヵ所霊場)を著作した。)

## フレデリック・スタールと53番札所円明寺の銅板

文献をみると、1960年代までスタールの名前はわずかしか登場しない。それ以降の文献にスタールが出てくるが、そのほとんどの場合、彼が53番円明寺の銅板を発見したことが書かれている。例えば、1969年の「四国八十八ヵ所」(平幡良雅著)には「大正十三年、四国八十八ヵ所に憧れて巡拝したアメリカのスタール博士は円明寺の本尊厨子にうちつけてあった銅板を高く評価して、その紀行文に発表した」(p79)。

多くの遍路文献には同じような内容の文章が引用されていた。しかし、すべての引用文の内容が一致していないのだ(表1)。例えば、スタールが巡拝した年が「大正十三年」、「大正十年」、または「大正年間」と書かれている。また、円明寺の銅板を「発見しました」もしくは「見ました」と載っており、銅板を発見したことを彼自身が書いたとされている紀行文は発見されていない。彼の名が文献に登場してから約40年に渡り、彼の情報はわずかで、彼の認知度は低い。彼が遍路の歴史において重要な「発見」をしたと言われていてもかかわらず、どうしてこんなにも彼の情報が少ないのだろうか。さらに違った角度から彼についての資料を追求することが必要となった。

## スタール博士についての資料源

海外では、スタールについての資料は幾つかの図書館に保管されているとわかった。例えば、シカゴ大学の図書館に「フレデリック・スタール・コレクション」があり、そこでは本人が書いた日記や手紙などが多く残っている。また、ワシントンDCにあるアメリカ国会図書館にもこのようなコレクションがあり、ハワイ大学の「オリバー・スタッター・コレクション」の中に、スタッター氏がスタールについての研究をしたノートなどがある。

スタッター氏は第二次世界大戦の間、軍人としてフィリピンやニューギニアに駐屯。1947-1954年の間、東京や横浜で働き、軍を退いたあとも研究のため日本に滞在していた。1961-1962年は下田、1968-1971年に

松山に住み、1980-1981年の間、神戸女学院で客員教授として勤務した。下田時代、初めて四国を訪れ、松山時代には2度（1968年、1971年）四国遍路をし、神戸時代に四国遍路についての映画を制作して、その3年後にその映画を上映し、また『Japanese Pilgrimage』（日本巡礼）を出版した。その本の中にスタールに関する記事を多数記している。例えば、「彼の名を知っています。スタールは私のシカゴ大学の人類学の教授でした。私が大学生になる前に退職されましたが、彼は伝説的な人物でした。彼は確かに四国遍路をする初めての外国人だったのです」（p237）。

国内でも、スタールについての資料は意外と豊富であることを発見した。例えば、四国4県の県立図書館にある大正時代の新聞（大阪朝日四国版、海南、香川新報など）を見ると、スタールの遍路旅についての記事や写真が30件以上あった。また、1919年に出版された『お札行脚』にはスタールの大正6年の旅行記が詳しく載っている。また、彼は日本について様々な文献を残し、彼の事が大正時代よく新聞に取り上げられていたのである。

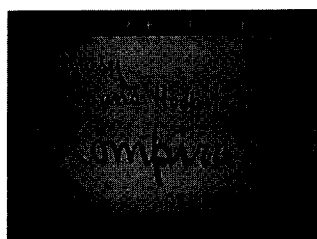
### スタールについての認識調査

2006年2月に110ヵ所札所（88ヵ所札所、20ヵ所の番外札所、金比羅と道後温泉）にスタールについてアンケートを出して、70%から回答を得られた。「スタール博士について聞いた事がありますか？」という問いに関して、13ヵ所から「はい」という返事をもらい、その内、9ヵ所がその理由を書いてくれた：

- 1) 神社に伝わる奉納品があるため（金比羅）
- 2) 確実ではありませんが、昔、何かの記事亦は写真記事等で読んだような記憶があります。
- 3) 文献を読んだ事がある
- 4) 遍路史の研究の資料で拝見したことがあります。
- 5) 53番円明寺の銅板納札の発見者と聞いております。
- 6) 53番円明寺にキリストンの十字名塔があるのを発見された方として聞いています。
- 7) 実は明德短期大学での講義で初めて知りました。
- 8) 額を見たことがあります。
- 9) 先代住職より。

また、「スタール博士に関する資料がありますか？」という問いに対して、「はい」の返事をくれたのはたった3ヵ所だった。それが金比羅、22番札所平等寺と53番札所円明寺である。

- 1) 金比羅 — 学芸館にスタールの自筆文：「Courtesy and Hospitality, Kōpira, Taisho 6.3.7, Frederick Starr」（親切ともてなし—金比羅）。
- 2) 22番平等寺 — スタールの自筆文と写真。「At Biodoji. Taisho 10.2.26. Frederick Starr」。
- 3) 53番円明寺 — スタールの遍路姿の写真。（大正10年と見られる）。



(1)



(2)



(3)

## スタールの人物象

スタールについて先述の認識調査が意外と参考にならなかったのも、アメリカにあるスタール関係の資料や国内にある大正時代の新聞、または本人の文献などから、彼についてのこと、または、彼と四国遍路とのかかわりを調べてみた。

ある本によると、スタールは：

「一八五四年九月二日長老派教会牧師の父フレデリック・スタール（博士と同姓同名）、母ヘレン・スタールの四子として、ニューヨーク州アーバーン生れ...一八八二年ラファイエット大学卒業、一八八五年同大学より哲学博士の学位を取得、一八八三年より一八九一年迄コー大学、チット大学、国立自然博物館（ニューヨーク市）、ポモナ大学に勤務し、生物、地理、民族、地質学の教授や分類、仕訳の作業を担当、一八九二年より一九二三年迄の多年に亘り、シカゴ大学の教授として勤務する。一九三三年八月一四日満州国より帰途、東京の聖路加病院で肺炎の為死去...」（『土佐史談』1984 p54）。

1904年に初来日して以来、スタールは亡くなるまでに15回日本を訪れている。毎回、訪日の際には、6ヶ月から1年間滞在して、日本中の様々な所を訪問した。彼は富士山を何度も登り、東海道や山陽街道を歩いた。彼は日本文化をこよなく愛し、研究に没頭していた。例えば、「...日本在来の謎、絵解き、雛かざり、祭礼のだんじり、玩具、カップ、納札、富士講、看板、アイヌ熊祭り、達磨、碁、将棋、寒詣り等いろいろの研究に余念もない」（『お札行脚』1919）。

その中のひとつが「お札」の研究で、彼は「納札会」というグループの会員となり、日本人と共に活動するうち「お札博士」という愛称で呼ばれようになった。彼は熱心に毎月の会合や大会に参加した。ある時、彼は日本アジア協会で納札について講演をし、その時のことを『Nosatsu-Kai』（1917）（図1）という文献に記している。その中で、納札の歴史や納札会の説明をしている。1921年には日本語に翻訳され、『納札史』（図2）として出版された。

例えば、

- \* 「その協会は現在200人以上のメンバーがおり、よく会合を開いています」（p1）。
- \* 「毎月開催している納札会は夜に行われています。毎月、幹事が交替で、会合場所と軽食、例えば、お茶、菓子、サツマイモなどを提供する決まりになっています」（p3）。
- \* 「外国人はめったに納札会に出席しません。私はたくさんの会合に参加して、毎回、お札の交換をするために特別なお札を用意しています」（p15）。
- \* 「納札会のユニークな特徴のひとつが、民主主義の精神で行われているということです。このように平等な条件で人が集まることは日本では珍しいことです。私は、最初に出席した会合で、集まった人の多様性に感動しました」（p16）。

納札会の唯一の外国人会員であり、日本中を旅して日本文化を数多く研究したスタールは、日本が大好きだった。『お札博士』（1925）には、スタールは「日本を愛する念の発露である。博士はよく日本本来の特質を見極めていられる。羽織袴がよく似合い、味噌汁や香の物を食べても平気なる博士はある意味から見て、日本に国籍を有せざる日本人と私は言いたい」（p5）（図3）と紹介されている。

また、『お札行脚』の序文には彼についてこう書いてある。

「お札博士の名は、随分と廣く日本國中に行き渡った。所々の神社仏閣に「壽多有」という納札も見受けられる。もう別々に、贅く申さんでも、スタール博士は分かっておられる人が多からうと思う。しかし博士は米國人ではあり、西洋文明の本家本元の人に相違ないから、矢張バター臭いハイカラな人と思う人も中にはあるかもしれぬが、それは大違い。」

「...純日本式の御暮らしぶり。何一つ日本人と違はない、風呂にも入り、さしみも味噌汁も茶も御菓子も召し上がる。何時御伺いしても畳の上にキチンと行儀よい座りぶりは、だらしのない日本人などは及びもつかぬ...」(図4)。

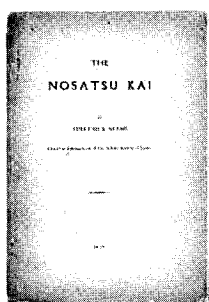
## スタールの死去

スタールは研究のため、世界中の様々な所を訪れていた。朝鮮に滞在中、病に倒れた彼は、治療のために日本に渡る。しかし、その数日後、1933年8月14日、彼は東京の病院で亡くなった。享年75であった。その2日後の8月16日、東京の青山にある教会で追悼式が行われ、この時、彼について次のことが述べられた。

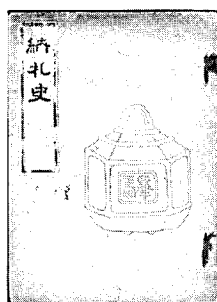
「彼が日本のもっとも頑強な親友で、アメリカの一番忠実な市民であった...彼はアメリカ人に日本の生活、歴史や組織を勉強してほしかった...彼は今回の旅を含めて、日本に15回来日しました...スタール博士は日本に滞在中、日本式の服装で過ごしました。彼の乗る汽船が横浜港に着くやいなや、スーツから家紋のついた羽織、袴に着替えました。彼の行動は、日本の制度や習慣に対する尊敬の意がこめられていたのです。また、日本に住む外国人が日本の習慣への尊敬の念を忘れてはならないという考えもありました。また、日本人が外国人のマナーに奴隷のように従って、日本の古くからあるしきたりを見捨てたり、忘れたりしないように、という警告の意味も込められていたのです...日本が西洋の国々との国際貿易のために、あまりにも譲った態度をとることにに対して彼は怒りを覚えていました。この日本にとって、真の友、スタール氏の事は日本人の心の中で永遠に生き続けることでしょう。彼の死去により、日本は真実の友を、アメリカは愛国心の強い忠実な市民を失うこととなったのです。しかし、スタール博士は、あなたは母国の隣にある、愛されていた国で亡くなったことを忘れないでいてください」(大阪毎日・東京日々新聞(英字):昭和8年8月19日)(図5)。

大の親日家であり、人柄の良かったスタールは、日本人にとっても愛されていた。それを物語るように、彼の死後、友人知人達がお金を募り、二つの記念碑を建立したのである。一つは東京都浅草浅間神社境内に、もう一つは静岡県富士山麓須走という所にある。文献をみると、「スタールの碑は昭和9年7月に浅草浅間神社境内に、9月富士山麓にそれぞれ建立された」(『外国人の足跡』朝日新聞、1979 p153)ということが書いてある。しかし、当時の浅間神社は第二次世界大戦の昭和20年3月東京空襲の時にすべて消失したと、近所に住む老人が言う。しかし、富士山の麓にある碑は現在も存在している。

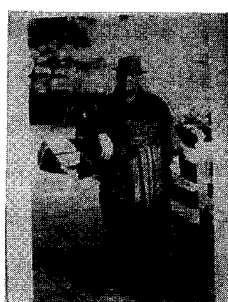
1936年に書かれた記事に富士山の麓にある碑についての説明が載っている。「これは1934年11月に、9,000円を費やし、建立されました。様々な人がお金を寄付しました。石碑正面の文章はスタールの親友である斉藤実(1858-1936年)、第30代内閣総理大臣(1932-1934年)によるもので、表面碑文は徳富蘇峰(1863-1957年)が書いたものです」(『Young East』1936 p42)。また、「彼の命日は8月14日で、彼の死去以来、友人達が毎年集まり、彼を偲んで慰霊祭を行っています。今年の夏は、彼の記念碑が建っている富士山の麓須走というところで行われました」(『Young East』p39)。



(1)



(2)



(3)



(4)



(5)

## 四国巡礼の動機

スタットラー氏が書いた『Japanese Pilgrimage』にはスタールの四国巡礼について次の事が書いてある。「彼が1917年、また1920年に高野山に行き、1917年に四国の予備訪問をして、1921年にやっと四国遍路を始めました...新聞記者は各お寺への訪問を記録して、各新聞は彼に車を提供しようとし、各町から彼に講演をしてほしいという依頼がありました」(p240)。しかし、スタールの真の巡礼動機はなんだったのだろう。彼が大正10年の巡礼中、32番札所の住職に日本での宗教的な巡礼は四国遍路しかないことと、他の巡礼道は観光客が行く所になってしまったということや、弘法大師への尊敬の念を語っていた。大正10年3月18日に今治での講演の中、彼が詳しく遍路動機や弘法大師を尊敬する理由を述べた。第二の理由は「四国そのものの研究のためである」、でも第一の理由は「この偉人(弘法大師)の残された足跡を親しく訪ねてみたい」と言っている。また、スタールがどうして弘法大師を深く尊敬するのかという質問に対して、5つの理由を挙げている：

- 1) 大師は非常に知識が博く内外の学問に通じていて当時の学者の中では一人だって大師と肩を並べ得る者はなかったのである。驚くばかり多くのことを知っていた方であることに尊敬する。
- 2) 大師は広く寛大な心で事物に接しました。全てのものに心を用いてしかも物を見る観察点を高め自分の知識の一部に吸収する能力があったのである。
- 3) 大師は大なる芸術家であった。大師が今日残された四国霊場の建物彫刻等は全て立派な芸術的の作品ばかりであることを認める。あらゆる仕事を完全になしとげ、立派に育てあげることが本当の芸術家の仕事であります。大師の事業はこの点にもうまくあてはまっている。
- 4) 実際の活動家であったことを発見したためである。大師は社界を改良進歩せしめるためには実際に社界の諸事相に面接しその陣頭に立って奮闘することを辞退しなかった。
- 5) 私は弘法大師は今日諸君のお国の宗教界で最も多数の信徒を有しその財産勢力に於いて最も優越せる真言宗の開祖、恩人であるということに私の尊敬の理由を求めるのである。

(海南新聞大正10年3月18-20日)

参考のため「資料1」にはスタールの大正6年と10年の巡拝詳細、たとえば、日程、ルート、動機、または、彼の日記などからの旅感想が記入している。

## おわりに

初の外国人遍路は誰だったのか、という疑問からスタールの名前が挙がり、この研究が始まった。当初、スタールを取り上げている文献が少ないことと、現在における彼の認識調査の結果が思った以上に低かったことから、彼は特別著名な人物ではないのであろうと思っていた。

しかし、当時の多くの新聞記事、彼の日記、実母への手紙、海外に残る資料などから、彼がどういう人物であったのか、いつ四国遍路をし、またその動機は何だったのか、などを明確にすることができた。

そして、今日ほとんど知られていない彼が、当時は著名人であり、大の親日家として多くの日本人から愛された人物だったことが明らかになった。

表1 スタール博士についての引用

年	本(題名)	著作・出版社	引用
2006 改版	四国遍路	平幡良雅	四国遍路に関心の深かったアメリカのスタール博士は大正十三年に八十八箇所を巡拝するが、円明寺の本尊厨子に打ちつけてあった銅板の納札を高く評価した。(p180)
2004	四国八十八カ所： お遍路の歩き方	河出書房新社	円明寺が一躍知られるようになったのは、大正十三(1924)年、四国遍路にチャレンジしたアメリカ人のスタール博士によるひとつの発見がきっかけだった。(p146)
2001	四国遍路の研究	白木知利辛・ 頼富本宏	大正十三年(1924)に四国遍路したアメリカ人のスタール博士が、円明寺の本堂内の厨子にうちつけてあった納札を高く評価して、その紀行文に発表した。以来、円明寺は納札のある寺として知られるようになり、スタール博士は「お札博士」と呼ばれた。(p83)
2001	NHKビデオ 四国八十八カ所		「シカゴ大学のスタール教授が大正十年に霊場をお参りして、その時に発見しました」(住職)
1999	NHK 四国八十八カ所		住職さんが「それをアメリカのシカゴ大学の教授だったスタール博士という人が、大正十三年に四国霊場お参りしたとき発見しました...紀行文に発表した...」(p139)
1996	四国88ヶ所めぐり	薄井八代子	大正十三年にスタールが札を発見した... (p111)
1993	四国八十八カ所霊場巡り	講談社	アメリカ、シカゴ大教授のスタール博士が大正十年にこれを紹介 (p66)
1989	四国へんろ	西村望	大正十三年にスタールが札を発見した... (p97)
1987	遍路：四国霊場八十八カ所	講談社	大正十年、アメリカのスタール博士がこれを紹介... (p91)
1986	四国八十八カ所霊場案内	池田書店	スタールというアメリカ人が当山の厨子にうちつけてあった銅板の納札を発見した。
1984	四国霊場をへんろして	吉本四郎	大正十三年、アメリカのスタール博士があこがれて四国八十八カ所を巡拝され...記述して発表したのである。(p139)
1984	四国遍路めぐりやすい 八十八カ所	平幡良雅	四国遍路に関心の深かったアメリカのスタール博士は大正十三年に八十八カ所を巡拝する... (p128)
1983	Japanese Pilgrimage (日本巡礼)	Oliver Statler	あとで、参拝中、53番札所で本尊が納まっている戸棚の後ろに宝物を見つけました。それがいままで発見されていない四国遍路の最古のお札でした。(p244)
1981	カメラお四国八十八カ所 写真の旅	汲田栄功	この寺に古い納経札が保存されていた。大正十三年、米国のスタール博士が本堂内で見つけたもの。(p116)
1981	四国へんろ記	伊藤延一	大正年間アメリカのスタール博士が四国八十八カ所にあこがれて巡拝したとき、円明寺の本尊厨子にうちつけてあった銅板の納札を高く評価して紀行文に発表し、円明寺は貴重な資料のある寺として知られ、スタール博士もお札博士と言われたという。(p105)
1979	現代の遍路	大雅堂	銅板の納経札は慶安三年、最古のものである。(p110)
1977	四国霊場の旅	徳島新聞社	大正十三年、四国八十八カ所にあこがれて巡拝したアメリカのスタール博士が円明寺の本尊厨子にうちつけてあった銅板の納札を高く評価して、そのことを紀行文に発表した。(p66)
1974	四国八十八カ所詳細地図帖	西村益一	それを発見したのがスタールというアメリカ人というのでも有名である。
1973	A pilgrimage to the 88 temples in Shikoku Island	Mayumi Banzai	私は住職さんに「シカゴ大学からきたスタール博士が、高く評価した有名な銅板を見せてくれますか」と尋ねました。スタール博士が吉野杖という長い棒を使ながら巡礼をしていた時、住職さんは中学校一年生でした。スタール博士が草鞋をはいていたことも覚えていました。(p177)
1973	お四国：霊場八十八カ所の 旅		円明寺には大正時代、八十八ヶ所を巡拝して、お札博士の異名をもつアメリカのスタール博士がそのお札を発見した (p169)
1972	歴史の旅：四国八十八カ所	瀬戸内海放送	大正十三年、アメリカのスタール博士が本尊を祀る厨子に釘つけられていたものを発見したと言われる (p165)
1969	四国八十八カ所	平幡良雅	大正十三年、四国八十八カ所にあこがれて巡拝したアメリカのスタール博士の円明寺の本尊厨子に打ちつけてあった板を高く評価して、その紀行文に発表した。(p79)
1950	四国遍路記	橋本徹馬	お札博士の苦言： 米国人で、先年四国遍路をしたお札博士のフレデリックスタール氏も、その感想文中に「...遍路が賽銭を奉納し、念佛を唱へ、納経版を貰ひ、掛物を買ひなどする之等の奉仕に対して、寺院及び僧侶は、實際何を為しつつありやといふが問題あり」と伝えているが、このスタール博士の言に対して恥じざる僧侶が、八十八カ所の寺院中に幾人あるであらうか。(p166)(参考：資料2)
1941	遍路日記	荻原井泉水	此本尊の厨子に釘付けしてある赤箔の納経札に「慶安三年...」とあるそうだ。これが遍路という文字の文献に出ている最初であって、これで見ると、四国遍路ということは、元禄から約三十年前の慶安時代から行われていたことが立証せられると、此寺の縁起の端に書いてあった。
1939	遍路と人生	高群逸枝	遍路には、いろいろの人が行っている...外国人ではアメリカのスタール博士、ドイツ人アルフレッド・ポナー氏などがある。(p67)
1936	四国霊場巡拝日誌	立命館出版	(なし) (p125)
1934	同行二人四国遍路たより	安達忠一	(なし) (p125)
1932	四国巡礼	小林正奈盛	(なし) (p2)

資料1：スタールの巡礼記録  
大正6年の巡礼

日程：3月3日—14日

ルート：

山陽街道の旅を終えて、広島県の宇品から船に乗って、長濱に着いて、それから汽車で松山（3月3日）—西条—土居—三島—川之江—海岸寺—多度津—金比羅（3月7日）—高松—善通寺（3月9日）—阿波池田—鴨島—徳島（3月12—13日）—神戸（3月14日）

動機：

「1917年に51番札所石手寺を訪問しました。その時、遍路をするということを真剣に考え始めました。」（大正10年3月17日の手紙）

「仏教の宗派の間で、スタール博士はどこよりも真言宗やその創立者、弘法大師、に関心がありました。」（『Young East』p40）

3月4日：51番札所石手寺や道後温泉を訪問：

「二日目の2時半に私は出かけることを決めて、道後にある有名な温泉と八十八箇所内の一つの有名なお寺に行きました。特に、道後温泉（日本で最古の温泉）に、是非おいで下さいという招待があり、私たちが来たら貸し切り状態にしてくれるということでした...その老住職が私たちに美しい絵と面を見せてくれました。その後、私たちは、温泉に行って、お茶と、鶴の形にした柔らかいお菓子を頂きました。その上、新しい浴衣まで頂きました。温泉からあがり、私たちは記念写真を撮り、三十年前に天皇が訪れた部屋に案内されました。」（日記）

（朝日新聞大正6年3月7日：道後温泉の前での写真）

3月5日：西条に着いたときに、「町の全ての道に私たちが歓迎するために旗がありました」。川之江に着いたら、「川之江小学校生徒三百余名は博士歓迎の小旗を携えて駅前に整列し楽隊でブカードレと鳴物入で迎えている。」

（大阪朝日新聞・四国版大正6年3月25日：四国膝栗毛（六））

3月7日：琴平を訪問：

「琴平は日本でも有名な神社の一つです。年間、百万人が訪れるそうです。四国ではもっとも有名な場所で、ここに訪れるためだけに多くの人が四国という島に来ます。下から素晴らしい本宮まで九百以上の石段があります。ここで、私たちは本当に驚かされました。約五百段を登ったところで、私たちは神社の庫裏に着きました。すると、そこの玄関で私たちが歓迎するために二十名以上の僧侶が階層順で立っていました。一番偉い三人の僧侶は左側にいて、その他の僧侶は右側に並んでいました。」（日記）

記念として、「Kompira. Courtesy and Hospitality. Frederick Starr. Taisho 6.3.7」を書いて残した。現在、これを学芸館に保管しています。

（朝日新聞大正6年3月9日：金比羅での写真）

3月8日：高松の栗林公園と屋島、また、善通寺を訪問：

「この午後、私たちは壮麗な古い庭園を訪問して、その後、屋島に行きました。この山の上に八十八箇所のお寺があって、そこで大歓迎を受けました。」（日記）

（朝日新聞大正6年3月11日：栗林公園での写真）

3月9日：善通寺を訪問：

「駅には多くの人々が旗を持って、私たちが歓迎してくれました。お寺に着いた時に、その暖かいもてなしにとっても感動しました。僧侶達は特別な行事の時のみに着用する服装を着ていました。彼らがまず口にしたことが『あなたがここに来ないのではないかと心配していました』という言葉でした。」（手紙）

3月11日：阿波池田を出発して、汽車で徳島に行く：

11番札所で「この貧しい小さいお寺は面白くなく、ポロポロでした。この可愛そうな住職さんはお札博士やスタールさんの名前を聞いたこともなく、急いで私たちをできるかぎり歓迎してくれました。」

3月12日：18番札所恩山寺と19札所立江寺を訪問：

立江では「私たちが来ることは住職さんに事前に知らせていて、私たちが歓迎するために彼は大坂への訪問を延期しま

した。ここの建物は大きく、2階のパゴダが最近、火事でなくなりましたが、近いうちに再建します。かなりの数の住民が駅に私たちを向かえにきてくれて、お寺まで同行しました。」

3月13日：今日、徳島市内の見物と歓迎会：（朝日新聞大正6年3月16日：徳島公園での写真）

「この歓迎晩餐会には、知事さんを初め、商業会議所会頭、その他徳島県一流の紳士諸君が、遺憾なく網羅されたと承る。」（『お札行脚』p181）（朝日新聞大正6年3月11日—スーパール博士歓迎会：13日午後5時春日館にて）

3月14日：

「今日はいよいよ四国を暇乞いの日である」（『お札行脚』p183）

「8時39分名残惜しい四国を離れる事と定まった」

その日の2時30分に無事に神戸に着いて、そのあと、和歌山まで行きました。

18日に堺市で「関西納札大会」に参加する予定です。

感想：

「...この行二週間、愛媛、香川、徳島、の三県有志が多量の厚意をもって一行を遇せられたことを博士に代わって感謝してここに筆をおく。」（朝日新聞大正6年3月31日：四国膝栗毛(十)）

---

### 大正10年の巡礼

日程：2月20日—3月27日

ルート：神戸—徳島（2月17日）—13—18番札所（2月18日）—1番札所（2月21日）—27番札所（3月1日）—高知（3月2日）—宇和島（3月10日）—松山（3月16日）—今治へ迎かう（3月18日）—西条へ向かう（3月19日）—善通寺（3月22日）—高松（3月24日）—徳島（3月26日）—神戸、大阪

動機：

\*「徳島へは4年前にも来てお札を集めたことがありますので馴染みがあります。今度も四国霊場を巡拝する目的は単にお札を収集するというのではなく弘法大師の霊跡を研究する傍ら四国の人情風俗そのた四国に関する一角の研究資料を収集するつもりだ。」（大阪朝日新聞大正10年2月19日）

\*「この偉人（弘法大師）の残された足跡を親しく訪ねてみたい願いが今度、私が四国へ来た第一の理由になっているのである。第二の理由は四国そのものの研究のためである。四国の土地、四国の人々の人情風俗を見聞することは私には愉快的な仕事である...」（海南新聞大正10年3月18日）

---

2月17日：徳島に行く。

「四国の徳島行き汽船に乗りました。ここから四国八十八箇所巡りが始まります。この順礼は千百年前に、私が好きな日本人の一人である弘法大師によって作られました。この順礼道は彼が創立した真言宗に属しています。私たちはこの順礼道を昔の遍路のように歩くつもりですが、必要な時には他の手段を使おうと思います。私は数年前からこの順礼を経験したかったので、今回、私は最後までなし遂げようと思います。」

2月20日：

「日曜日の夜に、私は仏教組織のために弘法大師について話しました。約250人が来ました。」

2月22日：この日に10番札所と11札所を訪問しました。

2月23日：11—12番札所。焼山寺に2時10分に着いた。

2月24日：12番札所焼山寺を出た。

2月26日：22番札所平等寺を訪問：

「ここで住職さんと弟子と住民のグループが私たちを迎えに来てくれました。」

23番で「住職さんが私たちを歓迎してくれて、高知新聞の記者もいました。たくさんの人が私のサインを欲しがりました。」



3月1日：

「池田君と僕はとても奮闘しています。この順礼がこんなにきついものだと事前に知っていたら、この旅をする決心をしなかっただろう。しかし、何があっても最後までにやり遂げるつもりです。」

3月2日：大阪朝日新聞大正10年3月3日「スタール博士・2日正午高知着」

3月3日：手紙の中に：

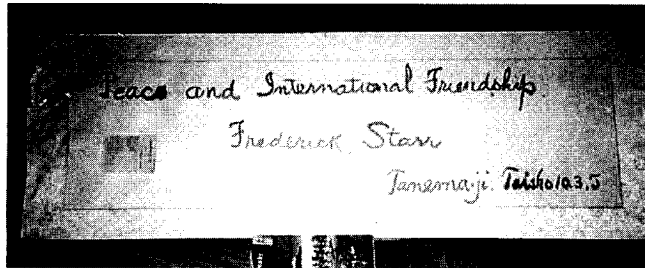
「私たちはとてもつらい旅の最中で、そして、これからもっと大変な所が待っています...私たちは四国を一周します。この島は日本の4島の内、一番訪れる人が少なく、また一番、発達してない島です...順礼が思ったより難しく、2ヶ月かかると思います。...30番札所に着きました...どこに行っても皆さんは私たちの順礼のことを知っていて、とても親切です。」

3月4日：33番札所雪溪寺を訪問：

日記には「今回の旅の感想などを書いた手紙を八十八カ所の住職に出そうと思っています。これは良い考えだと思うので、旅を終えたら、手紙を書くつもりです。」（参考：資料2）

3月5日：34番札所種間寺を訪問：

（掛け物）「Peace and International Friendship」大正10年3月5日



3月某日：35番札所清滝寺を訪問：

「一番楽しい経験が35番札所に行った時でした。彼等は私たちのために色々と準備してくれました。」

日記には「順礼中に私たちは盲人や障害者に会いました。這いながら順礼をする男性に会って、手に積木を持ち、膝当てを使っていました。ときどき、車に乗っている病人、または、障害者を見かけました。」

3月10-11日：宇和島：

3月10日：宇和島着：

3月11日：講演：「宇和島で開催した講演に約800人がきて、皆さんはとても熱心でした。」

（大阪朝日新聞大正10年3月12日「宇和島に於けるスタール博士」）

3月13日：「内子に着いた」（13日の日記）

大阪朝日新聞大正10年3月17日「お札博士来松・県公会堂で講演」

3月16日：石手寺を訪問：

3月17日：手紙の中に：

「私たちは八十八ヶ所のうち、53番まで終わりました。」

「旅の一つの好ましい特徴が仲間の遍路達です。四国には数百人のお遍路がいるのです。男性、女性、子供。皆が私と同じく遍路の特徴的な簡素な服装を着ています。」

3月18日：松山を出発する：今治で講演、泊まる：

3月19日：西条に向かう：

3月20日：59番札所-63番札所：

「私たちはその夜、王の如く接待されて、お寺で約250人に講演をしました。」（3月27日：手紙）

3月21日：65番札所雲辺寺に行く：（香川新報大正10年3月24日）

3月22日：善通寺に着いた：

3月23日：76番金倉寺から81番白峰寺：

3月24日：善通寺を訪問：

「自分は四国を回ったのは今回が初めてですが、四国には度々参りまして4年前も善通寺でご厄介になりましたが、その時の気持ちが非常に良かったので今回も一泊させて頂きました。」（3月27日：手紙）

87番札所長尾寺で「87番札所で食事とお風呂の後に講演をしてくださいという依頼があって、約200人がきました。また、翌日の午前6時に子供へのあいさつもお願いされて、子供と一緒に大人もいました。全部で約250人でした。」

3月27日：

「今日、私たちは早く起きました。フェリーで特別室をもらって、2時に神戸に着き、4時にここ（大阪）に着きました。今は常宿のホテルにいて、35日振りに普通の服を着ています。」（手紙）

感想：

「私たちは四国遍路を終えました。この旅が実現してよかったのですが、事前にその距離や難しさを知っていたら、巡礼をする勇気がなかったと思います。」（手紙）

「印象としては弘法大師が四国の人に及ぼした感化が思ったより深かったことです...四国の遍路さんが自分が期待していらぬのに非常に親切な心には特に感心しました。」（香川新報大正10年3月24日）

## 資料2 札所への手紙（大正一〇年）

拝啓。

四國八十八箇所靈場各寺の御僧侶へ。

親愛なる友よ。

小生只今漸く、四國八十八箇所靈場の遍路旅行を終へ候が、この旅は小生、生来の最も面白き経験の一と相成候。實は旅行中諸賢等の中、幾多の方より小生が受けたる印象は如何との御賢ねを度々受け候ひしを以つて、此處に一筆此手紙を差出候。小生は諸賢の親切に対し此處に感謝致候。小生元より諸賢等に特種の待遇を受くる特別の資格とありしものには候はず、云はば唯、一人の巡禮、又言語や人種に於ては異邦人、佛教信者にもあらず、遠き國の代表者たるのみに候ふて、決して特殊なる禮讓を期待するの權利とては毫も有之ものには御座なく候。然も小生は無上の親切を以つて遇せられ、小生が受けたる深切なる挨拶と款待の記憶は小生には永久、歡喜として忘るべからざるものに御座候。小生は貴寺が屋下に眠り、貴寺の御馳走を頂き、幾多の温かき人々と友誼を結び候。是等の事は小生の心に深く感銘致せしものに候。只二箇所寺院に於てのみ聊か不快の取扱を受候ひしが、然もその一寺は、責任ある任職不在なりし事に候。

（省略）

遍路中同行たる、他の巡禮の人々が小生にそがれたる温情深き興味とは、小生が深く心打たれたる事に候。巡禮達は兄弟の親みを以て、小生を親切に遇せられ候。元よりその行く所出来得る限りは互に助け合ふべしといふが、この遍路の規則に候も、小生その實例は数百回目撃候。小生自身にて、それを経験したる事も多く有之候。眞に佛光を慕ひて、八十八箇所靈場の長き旅路を行く幾千の巡禮と貴寺院との關係は如何なりや、又如何なるべきや、即ち順禮が寄付金を奉納し、念佛を唱へ納経を受け、掛物を買ひ、賜物又は宣言をなしたる時、相互の關係は完全なりと云ひ得るや、然も順禮が是等の奉仕の報ひとして、寺院及僧侶は事實如何なる事を為しつとありや、といふが問題に候。小生は現在吾人の眼に映るものより以上に巡禮に対して大なる同情とのあれかしと願ふものに候。僧侶こそは、挨拶又は勧告の辭、又は、短き説経によりて、測り知るべからざる善の權威を支配し得るものに候。以上の挨拶を以て、小生は、筆を擱くべく候。終りに再び貴賢諸氏の御親切に感謝し、同時に、今より壹千年の昔、それ自身に有意義なる生涯を送り、甚大なる感化を残されたる開祖弘法大師の名を恥しめざる様、貴兄が寺院をして、重大に有益なるものと、なざる事を渴望致すものに御座候。

敬具

大正十年三月二十九日

米國。フレデリック・スタイル

（アメリカ国会図書館所蔵）